

第1章 春を植える



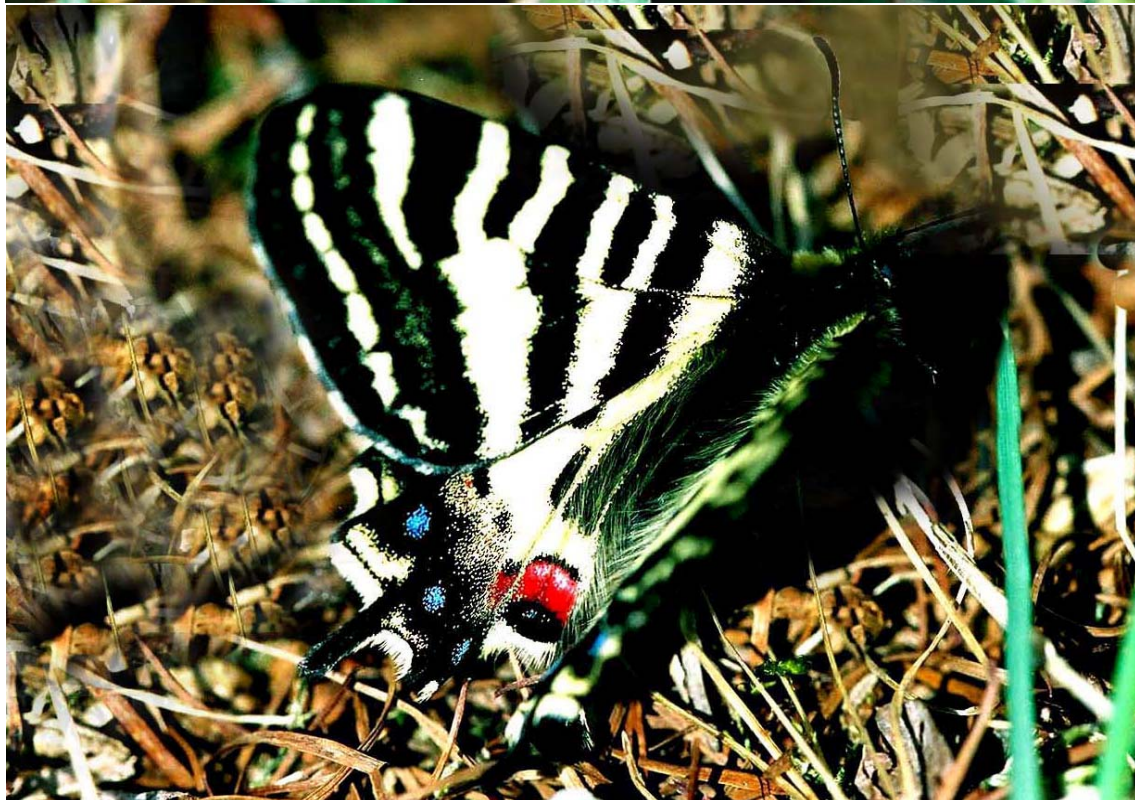
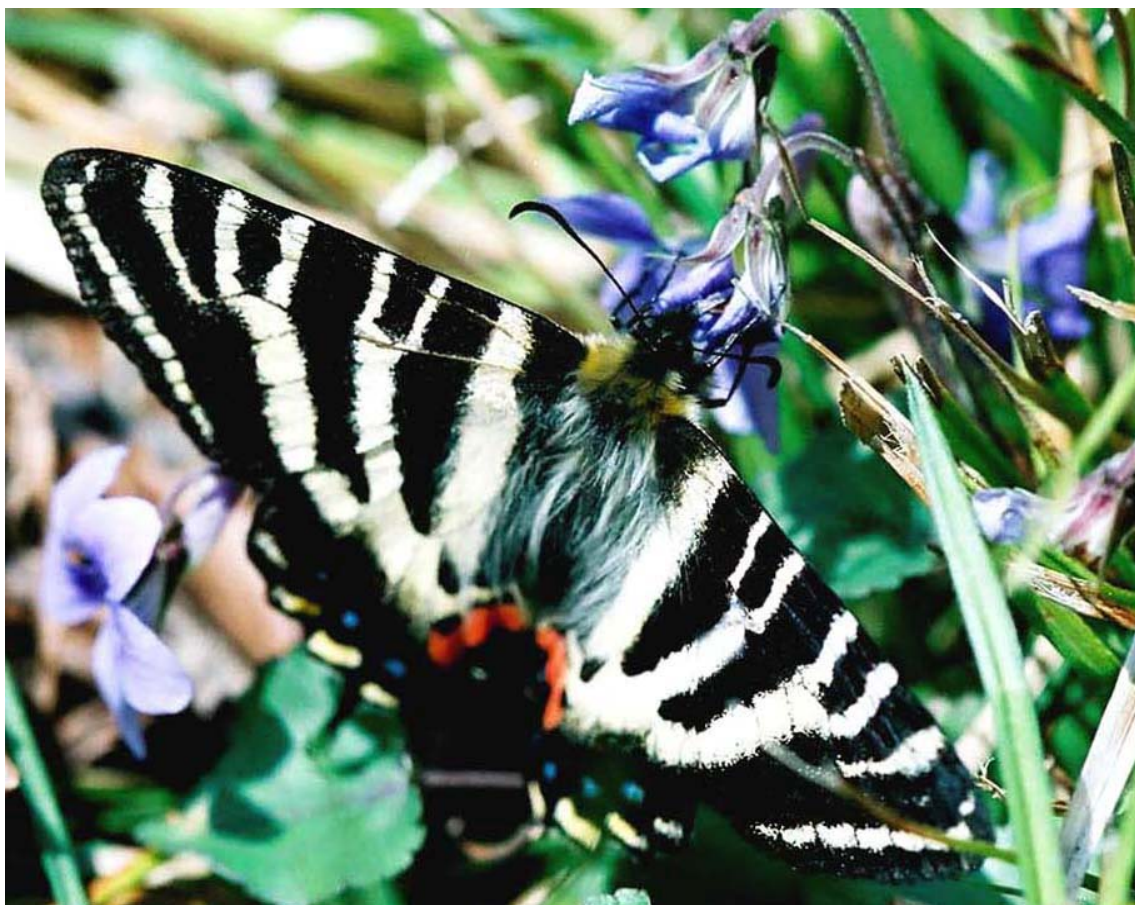
季節は違うことなく、どこの山にもどこの家にも必ず廻ってくる。さあ、庭に春を植えよう。

【I】 まずは球根を育ててみよう

球根植物は暑さにも寒さにも強い。それは自分の生存上、都合が悪くなってくると、十分に栄養分を貯えた球根の中に閉じ込めて、しばし環境の変化を待つという、巧みな構造になっているからである。しかも地下の温度というものは、地表近くはともかくとして少し深くなると、東京近辺では0℃以下にはなかなか下らない。雪でも積もれば蒲団に包まれているのと同じで、零下にはまずならない。雪深いところなら、なおさらである。ある科学者が最高最低温度計を山形県鶴岡市で雪の下に入れておいて、春になって取り出してみたところ、ちょうど零度を指していたという。寒い雪国でも、いろいろな植物が春を迎えることができるのは、こんな自然界のメカニズムが働いているからなのである。

春に花の咲く球根植物はどれも秋に植えるのが普通だが、その植え時は花が咲く3~4カ月前、だいたい100日ぐらい前がいい。例えば12月に咲く日本水仙なら8月頃というわけである。植える深さは種類によっても異なるものの、水仙やヒヤシンスなどは深く植えると丈全体が高くなる傾向がある。鉢で栽培するときには、球根の上部が半分ぐらい顔を出すほどでちょうど良い。また地植えの場合はできるだけ大きく、深く耕すようにしたい。肥料は多めがよく速効性の合成肥料のほか、遅効性の油粕や堆肥なども与えるようにする。土質はチューリップやヒヤシンスなどは特に砂状のものが好まれるが、一般には黒ボカでも十分である。ただ比較的乾燥地を好むので、過湿地の場合は盛り土する必要がある。ほとんどのものが陽あたりを好み、日が陰るとクロッカスのように花を閉じてしまうものも少なくない。できるだけ陽当たりの良い場所に植えてあげたい。また風があたるとチューリップのように痛みやすいものも多いので、特に花の大きいものは花時には風の害に注意が必要である。もう一つ大事なことは球根植物の原産地は、西アジアから地中海方面のものが多くという事実である。このあたりはアルカリ性の土壌のため、酸性土を嫌う。このため石灰を与えることが重要である。また水仙にしろチューリップにしろ、マスで見の方がよく映える。パラパラ植えるよりも、まとめて植えることをおすすめしたい。オランダのリッセ市にあるキューケンホフ公園はいろいろな意味で庭づくりの参考になる。

※花冠と副花冠=花冠は複数の花卉からなる集合体で、花卉と萼とを合わせて花冠ともいう。ともに雄蕊と雌蕊を守る役割を担っている。副花冠は花卉の内側にある花卉状の付属物で、スイセンなどによく見られる。単に副冠ともいう。植物の花や葉の構造や名称等に関しては[植物の用語集図説]を参照してください。



春の女神といわれるギフチョウ(神奈川県相模湖付近) 上と、ヒメギフチョウ(長野県川上村) 下。



これは2016年4月6日に軽井沢で撮影した写真である。この季節、成虫で越冬したタテハチョウの仲間は、暖かい日にはどこからともなく現れて日光浴に余念がない。ところがその場所にはそれぞれ縄張りがあつて、他種や同種でも他のチョウが現れると激しい縄張り争いが始る。ところがどういふわけか、上のシータテハと下のエルタテハが呉越同舟、同じ白樺の木の日溜りで、羽を開いて体温を暖めている。ともに幼虫はニレ科の植物を食べて育つ。

この項に記されている植物のリスト

【 I 】 まずは球根を育ててみよう	01-01-00-1
1) スイセン=水仙	01-01-01-1
2) ヒヤシンス=風信子	01-01-02-1
石灰の話	01-01-02-3
3) チューリップ	01-01-03-1
イノシシ対策	01-01-03-4
4) チューリップ園探訪	01-01-04-1
5) クロッカス	01-01-05-1
6) スノードロップ	01-01-06-1
7) スノーフレーク	01-01-07-1
8) ブルーベルとシラー	01-01-08-1
9) ムスカリ	01-01-09-1
10) アマリリス	01-01-10-1

目次に戻る
